

第1章 胎内市の概況

1 沿革

中世のこの地域は、「奥山荘」といわれる一つの荘園により発展してきました。この地域には今も城氏やその血縁の女武将・板額御前にまつわる史跡や逸話が多く残り、郷土の誇りとして語り継がれています。

鎌倉時代には、当時の地頭・和田氏が支配し、その後財産分与により領地は分割され、地域の中央を「中条（中条氏）」、北側を「北条（黒川氏）」と呼ぶようになります。



明治22年、「市制町村制」を施行され、旧中条町の区域は、中条町、柴橋村、本条村、乙村、横田村、松塚村、築地村、堀切村に、旧黒川村の区域は黒川村、鼓坂村、坪江村となりました。

明治34年、いわゆる明治の大合併により旧黒川村地区は現在の区域になりました。同年、旧中条町も柴橋村、本条村と合併しています。

旧中条町は金塚村の一部を編入した後、昭和31年には乙村（明治期に横田村と合併）と合併しています。

昭和39年には旧中条町・黒川村を含む5か町村により「中条地区町村合併協議会」が発足したものの、昭和41年の「7.17 水害」で協議は中断し、水害から免れた築地村が旧中条町と合併し、旧中条町は現在の区域になりました。しかし、翌42年にも両地域を含む下越地方は「8.28 水害」に見舞われ、旧町村の復興を第一として、以来合併協議は立ち消えとなりました。

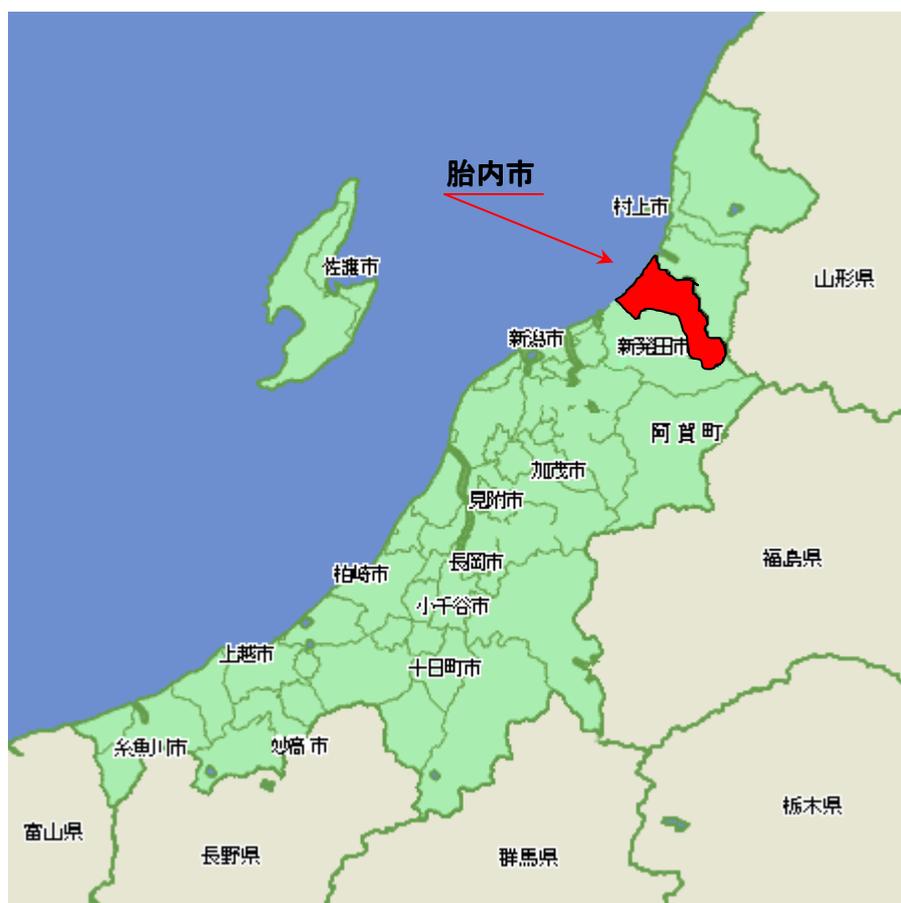
平成15年11月になり、旧中条町・黒川村両町村長、議員による「中条町・黒川村合併研究会」が設置され、程なく「中条町・黒川村合併対策室」が旧中条町役場内に設置されました。同年12月25日に「中条町・黒川村任意合併協議会」が設置され、平成16年9月17日に「中条町・黒川村合併法定協議会」へ移行し、いくつかのハードルを越えながらも、両町村の合併の合意が形成され、平成17年9月1日に胎内市が誕生しました。

2 地勢と自然環境

本市は、新潟県の北東部に位置しており、東には飯豊連峰（1,887m）が山形県境に接し、西には日本海が広がり、総面積は265.18㎢となっています。

県都・新潟市までは約40kmの位置にあり、平成14年秋に開通した「日本海東北自動車道」により、この地域にも高速交通社会が訪れました。

四季折々の美しい自然に彩られるこの地域は、飯豊連峰を源とする母なる川・胎内川を中心に生活域を形成しています。15kmに及ぶ海岸線には砂丘と松林、胎内川扇状地には緑の優良農地が広がっています。地域の中央には南北に楡形山脈・蔵王山塊が連なり、平野部と山間部を分けています。

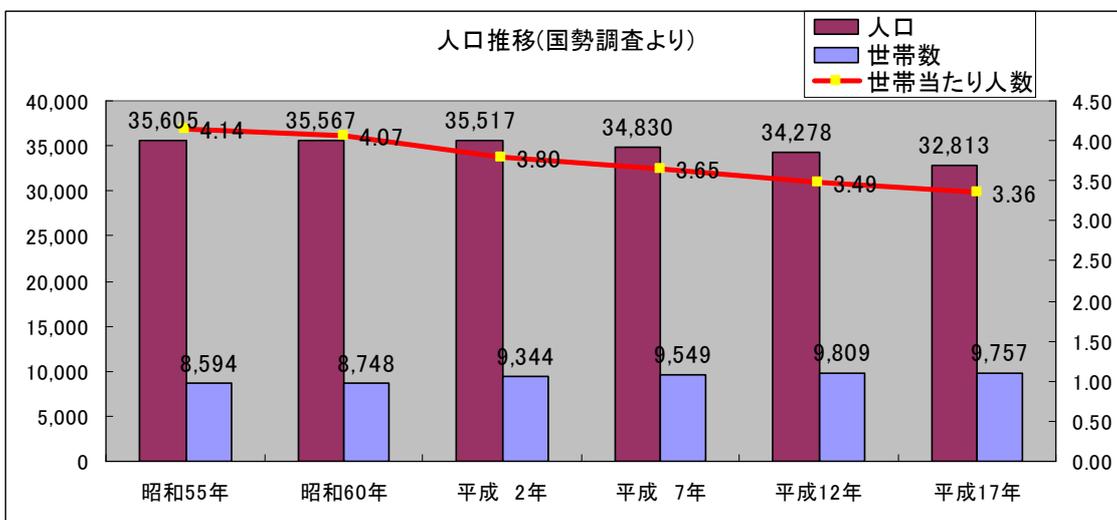


3 人口と世帯

本市の人口は、平成 17 年国勢調査における人口は 32,813 人、平成 18 年 4 月の住民基本台帳では 33,273 人となっており、平成 2 年ころまでは減少傾向にはなかったが、それ以降は減少傾向が加速し、平成 12 年に比して 4.5 ポイントの減少となっています。

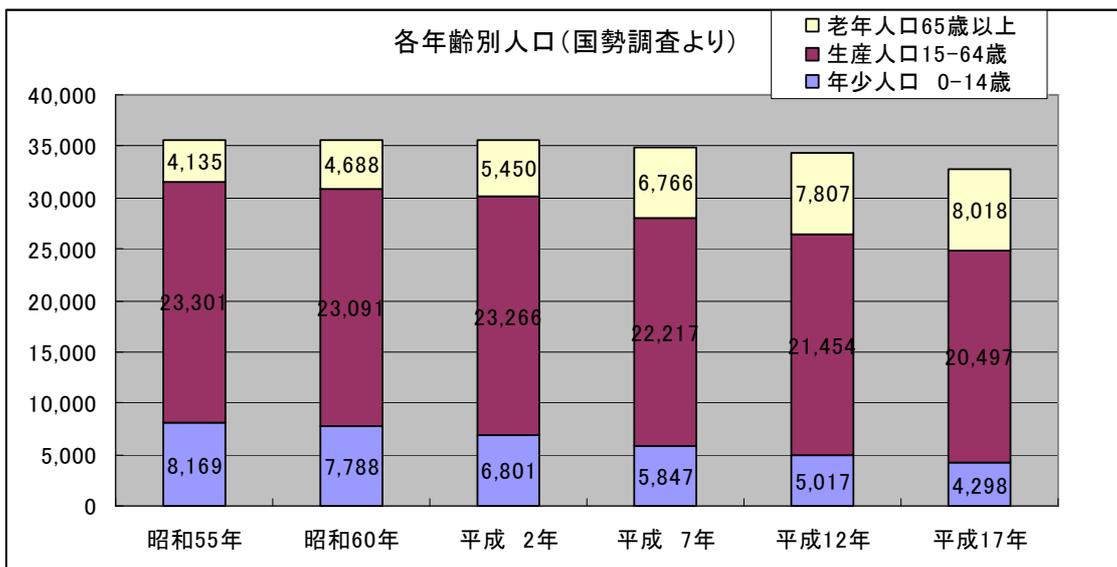
加えて、人口動態での増減をみた場合、転出による社会的要因の減少のほか、出生率の低下による自然減少が顕著にあらわれています。

【人口推移】



世帯数の推移は、増加傾向にあります。世帯当たりの人数は減少しています。これは、核家族化が進んでいることに原因があります。

【年齢3区分別人口推移】



年齢3区分別人口で見ると、年少人口及び生産人口の減少の反面、老年人口の増加が進んでいることがうかがえます。

4 産業構造

本市の農業は「コシヒカリ」をはじめとする稲作を基幹に、チューリップ（球根）や葉たばこ、ねぎ、大豆等、肉用牛などを取り入れた複合化が進んでいます。

工業については、昭和 30 年代に大手企業の進出が相次ぎ、近年中核工業団地が造成されるなど、県北の工業都市としての基盤を確立しました。

商業については、国道 7 号線沿いの大型店進出も相まって、独立した商業圏域を形成しつつあります。

観光については、昭和 40 年、国設胎内スキー場が完成したのをきっかけに、豊かな自然環境を生かしたスキー場、ホテル、ゴルフ場など施設整備を行い、観光客の入り込み数は、平成 6 年度に過去最高の 96 万人に達しましたが、景気の低迷による節約ムードや低価格競争などの影響により、全国的な傾向とはいえ観光収入面では厳しい状況にあります。

また、長池公園で毎年開催されるチューリップフェスティバルが、県内外からも観光客を集め、入込数も微増の状況にあります。

